

書 評

松岡光治編
『ギヤスケルで読むヴィクトリア朝前半の社会と文化』
(溪水社、2010年)

松 村 豊 子

本書は松岡光治氏が『ギヤスケルの文学——ヴィクトリア朝社会を多面的に照射する』(2001)に続き、編集の采をこれまで以上に精力的に採った生誕二百年記念論文集である。かつて「女らしさ」を謳った「鳩」のような女性作家だとして同時代のジョージ・エリオットやブロンテ姉妹ほど高く評価されなかったギヤスケルは、ヴィクトリア朝前半を代表する作家の1人として本書の玉座に燦然と輝いている。評者が学生だった頃(四半世紀以上も昔)、ギヤスケルを論文のテーマに選ぶ学生はほとんどいなかった。反面、G・エリオットやブロンテ姉妹は解放された女性作家として女子学生の間で圧倒的な人気を誇った。この流れを変えたのはヴィクトリア朝文化研究の国内外における隆盛である。産業革命後の経済産業の大変革が人々の日常生活に及ぼした、全容把握が未だに不可能とも思える多大な影響が注目されるようになると、当時の新興工業都市マンチェスターで牧師の妻として人生の大半を過ごしたギヤスケルにも新たに脚光を浴びるようになる。松岡氏が「まえがきに代えて」と「あとがき」において言葉を変え繰り返し力説しているように、このような研究動向の変化こそがギヤスケル再評価の原動力になったとも言える。本書では従来の消極的で一面的なギヤスケル像は多面的なアプローチが可能な躍動感溢れるものに一新されている。このことは全体構成からも明らかで、昨今のギヤスケル研究において興味深く注目されるテーマの多くが6部30章に入念に分類され、各章をその分野の調査研究に意欲的に携わる研究者が担当している。大項目は序章：歴史、第1部：社会、第2部：時代、第3部：生活、第4部：

ジェンダー、第5部：ジャンル、第6部：作家で、それぞれが5章から成る。そして、執筆者34名のうち4名は海外の第一線で活躍中の研究者である。《巻頭言》には日本でも広く知られたJ・ヒリス・ミラーが書き下ろし原稿を寄せ、本書の画期的な企画を称賛している。ミラー氏の賛辞を俟つまでもなく、本書は作家作品論を中心とする文学研究という一般的な定型を打破した斬新な研究書であり、ギヤスケル及びヴィクトリア朝文化研究の今後のさらなる躍進を支える大著である。

序章においてヴィクトリア朝の歴史研究に精通した村岡健次氏は、まず、ヴィクトリア朝の大きな特質として工業化という産業構造の変化に伴う社会階級の成立を挙げ、次に、ギヤスケルが生きたヴィクトリア朝前半における紳士理念、労働問題、中産階級の女性による慈善活動といった社会問題について論じ、続く第1章から第30章で論じられる個別テーマ（いずれも示唆に富んだ力作）の全体的な時代背景を簡潔的確に紹介している。

第1部全5章では変革変化の社会的影響とギヤスケルの取り組み姿勢が論じられる。アラン・シェルストン氏は「教育」をテーマに選び、教育改革の一般的な概要を紹介した後、功利主義的管理教育が物語の興味深い題材になるのが、ギヤスケルの場合、北部工業都市でなく南部農村を背景とすることに注目する。日本語訳は猪熊恵子氏による。次に、松村昌家氏はマンチェスターにおける「貧富」の対照に着目し、『メアリ・バートン』を酷評したサミュエル・グレッグが実は社会改革に熱心な模範的な工場主であったことを貴重な資料によって解き明かす。新井潤美氏は「階級」を軸に、パターンリズム的な階級関係が工業都市では覆り、上昇志向が奨励され、主人と使用人は実質的には友人関係であり、主人は諸々の手引書に導かれて主従関係の外観を保持していると説く。「北」から「南」への小説舞台の移動は、ギヤスケルが上昇志向を危険視し始めたことを意味するのである。「国家」について論じる玉井史絵氏は、ギヤスケルが労働争議の解決法を自由主義貿易の国家的奨励により可能になった帝国各地への移民に求める一方、労使相互の積極的な理解に求めたことを論証する。ギヤスケルが労働者による詩歌を積極的に作品に取り入れていたことにも言及している。大田美和氏はギヤスケルの労働称揚を「自然」と関係付け、その自然描写が支配階級の視点から自然を描く「牧歌」でなく、労働称揚に根ざす「農耕詩」

の伝統を継承していると説く。

第2部は荻野昌利氏の「科学」で始まる。同氏は「進歩」と同義で使われた「科学」をめぐる諸言説を筋目正しく概説し、急激な技術革新を極端な格差社会の元凶とみなさず、「科学」と「宗教」の対立を「教理的に深刻な問題」(131)ととらえなかった知識階層(勿論、ギヤスケルも含む)の楽観的な姿勢に鋭い疑問を投げかける。荻野氏に続き、富山太佳夫氏は宗教論議に疎遠な日本の文化風土を歯牙にもかけず、個人的な絆が「人生の核心」(146)となるほど重視されるギヤスケル作品では思想的宗教的諸要素が異種混在するため、作品が宗教小説として成立することはないと断言する。宮丸裕二氏は科学の申し子ともいべき鉄道の発達と郵便制度改革とを関連付け、手紙が果たす社会的機能だけでなく文字文化そのものの意味の変容を論じる。石塚裕子氏は「子供時代」において、まず、工業化の大きな変遷を背景とする子供像の変容の概要を述べ、児童労働や養育院に言及しながら、ギヤスケル作品にみられる児童文学の諸相について論じる。評者の個人的な好みから敢えて想像を逞しくするなら、もしこの論が第5部で展開されるなら、ファンタジーに頼らなかったギヤスケルの強靱な精神と実務能力が一層明白になったにちがいない。松岡光治氏の「レッセ・フェール」論は『イギリス蜜蜂の巣』の紹介からはじまる。同氏は自助の精神が増長する「レッセ・フェール」とその弊害を補填すべき相互扶助の精神との関連性をわかり易く述べた後、ギヤスケルが提唱する「個人的接触」は悪化する労使関係の改善策として楽観的すぎるのではないかと疑問を投げかけ、社会問題の原因を「無作為の罪としての無関心」(206)に帰し、その楽観的な解決策が「現状の道徳的改善」であることを明らかにする。編者にふさわしい問題意識の高さが光る論考である。

第3部では坂井妙子氏が「衣」、宇田和子氏が「食」、三宅敦子氏が「住」、中田元子氏が「娯楽」、そして、武井暁子氏が「病気」について興味深い図版・文献を紹介しつつ論じる。第1部や第2部で論じられた内容とは質的に異なり、ここでは研究史が比較的浅い身体論的な話題が満載である。各論の仔細な内容紹介を割愛するが、この分野においてギヤスケルの豊富な女性体験がもっとも素直に作品に反映されることを一言付け加えたい。

第4部ではギヤスケルが父権制社会の諸々の抑制機構によって歪められ

た女性経験をどのように表現しているかが論題となっている。田中孝信氏は独身女性の「女同士の絆」、鈴木美津子氏は極度の抑圧状態にあった「女性虐待」、市川千恵子氏は買売春反対運動の最中における「売春」、田村真奈美氏は女性の使命と作家の使命が時として一致しない状況下における「ミッション」、波多野葉子氏はレディー・パターナリストの変容と「父親的温情主義」との関連について精緻な論を展開する。市川章では刺激的な文献が多数紹介されている。中でも、伝染病条例撤廃運動の原動力だったジョゼフィン・バトラーの女性の性と労働に関する言説は150年近い時が経過した現在でも新鮮である。

第5部ではギヤスケル作品がジャンル別に読まれる。ゴシック小説研究に精通した木村晶子氏は「ゴシック小説」だけでなく、リアリズム小説にとり込まれた形のゴシック的要素に着目する。大野龍浩氏は信仰告白と恋愛とを関連付け、「恋愛小説」を論じ、矢次綾氏は「歴史小説」を読み、急激な技術革新により消滅しつつある歴史文化を「過去」として記述するギヤスケルの終始一貫した姿勢に着目する。推理小説というと鉄道を連想するケースが多いが、梶山秀雄氏は純粹に「推理小説」としてギヤスケル作品を読み、ミス・マティがミス・マーブルのような「優秀な安楽椅子探偵」にもなれた可能性について論じる。金山亮太氏は「演劇的要素」に着目し、革命と混乱の時代に隆盛を極めるメロドラマが『克蘭フォード』においていかに有効に機能しているかを解き明かす。

第6部では女性作家ギヤスケルが多面的に論じられる。新野緑氏は「自伝」とその虚構性に着目し、『マンスフィールド・パーク』と『妻たちと娘たち』とを比較検証しながら、ギヤスケルにおける「自己」の謎を明解にする。パトリシア・インガム氏はギヤスケルの「言語」、特に労働者階級における方言使用に焦点を当て、ギヤスケルが他の小説家よりも事実の正確な表記に関わった作家であること、また、ディケンズへの影響を検証する。日本語訳は松岡光治氏による。「出版」において、ジョウアン・シャトック氏は従来あまり論じられたことがない職業作家の側面に注目し、小説を書くことに専念したG・エリオットが特殊で、小説だけでなく書評やエッセイを諸々の新聞雑誌へ投稿し続けたギヤスケルの姿勢が当時も今も女性作家の典型だと言う。日本語訳は小宮彩加氏による。大島一彦氏はギヤスケ

ルのすべての長編小説に言及し、彼女の「ユーモア」の特質について論じ、長瀬久子氏はギヤスケルが執筆活動を通してディケンズ、ブロンテ姉妹、そして、G・エリオットとどのような交友関係を築いたかを丹念に追跡調査する。

矛盾に満ちた変革・進歩の時代を駆け抜けたギヤスケル。彼女のしなやかでしたたかな作家像と大小さまざまな作品は、共存共栄の精神が国家間の関係だけでなく個人レベルの関係でも広く世界的に提唱される 21 世紀の現在において、ますます興味深い研究対象になると思われる。とは言え、本書はテーマが上記のように多岐にわたり、参考文献・索引も質量ともに膨大な 700 ページにおよぶ大著である。まずは興味が湧く時に、関心がある章から読み始めることを薦めたい。本書は今後の発展的研究に欠かせない必読書なのである。